

清沢満之の「自覚の一体」としての靈魂定義について ——ロツツェの影響を中心に——

Bernat MARTI-OROVAL

1. はじめに

明治 25 年に出版された『宗教哲学骸骨』（以下『骸骨』と省略）の第 3 章「靈魂論」において清沢満之（1863–1903）は靈魂の有形説（最も原始的な靈魂論であり、靈魂は形態があるという説）と無形説（靈魂は実体がなく物質の作用に過ぎないという唯物論の立場）への批判を通じて、清沢自身は靈魂は「自覚の一体」とであると定義した。近年清沢に関する研究が増えて来たが、彼の靈魂論に触れた研究はそれ程多くはない。その中で清沢は「自覚の一体」という靈魂定義を考え出した時、西洋思想からその着想を得たと推測する学者がいる。しかし、小稿ではそれらの専門家によって示された清沢への西洋思想の影響の分析は紙幅の都合で控え、今まで研究されていない西洋哲学者の一人、ルドルフ・ヘルマン・ロツツェ（Rudolf Hermann Lotze 1817–1881）が清沢の靈魂論に及ぼした影響を解明したいと考える。

2. 靈魂の定義

ロツツェの影響を分析する前に『骸骨』の靈魂定義を紹介し、解釈を加える。

常に前念後念の覚知が同一体に記憶せらるゝのみならず数年数十年の間に身体の物質は新陳代謝するも其間の覚知が記憶回想せらるゝ已上は茲に不断相続の一体なかるべからざるなり故に精神の本体は自覚の一体即ち靈魂にありと謂はざるべからざるなり。（『清沢満之全集』（岩波書店、2002 年）第 1 巻、16 頁。以下『全集』と略す）。

この文章の解説を試みると、清沢にとって人間のそれぞれの精神作用（印象、思い出、感情等）はその「自覚の一体」によって統一されている。換言すれば、全ての心の内容を保持して過去と現在の私達の同一性を守る認識機能を「自覚」と清沢は名づけた。但し、『骸骨』の中では「自覚の一体」は単なる靈魂定義としてだけでなく、靈魂の存在の一つの証拠と見做されている。『骸骨』の第 4 章において、宇宙ではあらゆる現象が変化している中で基礎になっている「一体

(10) 清沢満之の「自覚の一体」としての靈魂定義について (B. MARTI-ORVAL)

貫通の原理」が不可欠であると清沢は訴えている。それ故、自然の現象と同じく、人間の場合も全ての変化の下になっている土台の存在が不可欠であり、それは靈魂なのだと清沢が考えていたのである。したがって、『骸骨』では上記の論拠に基づいて「自覚の一体」という定義自体が直ちに靈魂存在の証拠として紹介されている。その論法は以下の『骸骨』の引用で明らかになる。「靈魂實在の証：自覚一致、転化基本」(『全集』第1巻, 18頁)。要するに、清沢にとって「自覚」とは単なる認識作用の中心というだけではなく、形而上学的な真理である靈魂の存在と深く関連しているということである。

3. 「自覚の一体」とロツツェの思想

清沢の靈魂論に触れた専門家の間ではロツツェの影響は探究されていないものの、実はその影響を既に指摘した学者の一人、立花銑三郎(1867-1901)がいた。『骸骨』の発刊の同年に立花により「宗教哲学骸骨ヲ讀ム」という批評が『哲学雑誌』に掲載され、その中に、「自覚説ヲ立セラレタル証明ハ「ロツツェ」氏ノ証明ト同一ナルガ如シ」(『哲学雑誌』69号, 1892年, 452頁)という文が見られる。清沢自身はその批評を読んで気に入ったようであったが、清沢の研究者には立花の指摘を問題にした専門家はこれ迄いなかった。以下、立花の指摘を基にして清沢の靈魂論へのロツツェの影響を探りたい。

清沢は東京大学で哲学を専攻していた頃に、ロツツェの直弟子ルドヴィッグ・ブッセ(Ludwig Busse 1862-1907)が東京大学で哲学科目担当者になった。ブッセの講義内容は自身の先生であったロツツェの理論に基づいていたので、それを契機に恐らく清沢はロツツェのことを知ることになったのであろう。ところで、清沢の書庫目録を調べると、ロツツェの書物は3冊掲載されている。更に、1888年に清沢は哲学館で哲学を教えることになった時、英語に翻訳されていたロツツェの著作『形而上学(Metaphysic)』の3部の内の第1部「万有の関連について(On the connexion of things)」をハンドブックとして講義した。哲学館の講義対象にはならなかったが、ロツツェの同じ著作『形而上学』の第3部、「精神存在に就いて。心理学(On mental existence. Psychology)」を読むと、清沢がその後論究した靈魂定義に類似している論法を確かに窺うことができる。ここでは簡単にその共通点について説明したい。

先ず、両思想家においては靈魂の定義はかなり近接している。清沢の『骸骨』では「自覚の一体」、又は別の宗教哲学関係の資料では、「自覚の一致」や「自覚

清沢満之の「自覚の一体」としての靈魂定義について (B. MARTI-OROVAL) (11)

の統一」という定義から靈魂の存在が推論されている。その一方でロッツェの場合も、靈魂を定義するに当たって「意識の統一 (the unity of consciousness)」という言葉を用い、清沢の定義と正に同じである。

その上、両思想家が唯物論に批判的であることに注目する必要がある。清沢の『骸骨』では唯物論における靈魂説は、「物質の外に靈魂の別体あるにあらず 物質分子の結果作用が即ち心識或は靈魂の作用なりと謂ふべきなりとす (中略) 靈魂説中の最も非理なるものなり」(『全集』第1巻, 14-15頁) と紹介された。その説に対して清沢は自身の靈魂定義たる「自覚の一体」が、唯物論を論破できるものと考えていた。その論法は次のようである。要約すれば、心を内観すると、確かにその中では外界の経験との直接関連を推理できる感覚等の精神的現象はあるが、それらの現象を統一できる「自覚」という作用は、外界の物質から生じたとは考えられない。したがって、唯物論者にとって靈魂は「合果なるが故に別体なしと云ふと雖ども吾人の見る所によれば合果は反て必ず其由て起るべき一体あることを証するもの、如し (中略) 精神作用は物質の分子作用の合果なりとするも此合果を生ずるとき特別の一中心体なかるべからざるなり これ正に靈魂といふべきものならんか」(『全集』第1巻, 15頁) ということになる。上記の『骸骨』の引用とロッツェの『形而上学』の論法を比較して見ると類似点が明白になると考える。ロッツェは、唯物論の前提が正しいのなら、我々の心の中で繋がりのない精神要素は秩序なくひしめいている筈であるものの、我々の心を内観すると実はそれらの精神作用は「意識によって統一されている」と体験することができると論述する。ロッツェにとって「(唯物論者の) 理論によれば、あらゆる心的表示は中心を欠いた幾つかの構成物の最終結果に過ぎなくなる。それに反して、我々の内的経験は「意識の統一性」という事実を表すものであるため、靈魂の独立性の確信が証明される第3の論破されざる根拠がここにある」ということである¹⁾。

両説の類似点の説明を続けると、ロッツェも清沢も靈魂は「単一」とであると論じた。清沢の『宗教哲学講義 (教学誌)』の中で、「自覚ニハ必ス統一アリ精神ノ特性ハ自覚作用ニアリト云ハ、精神ノ本体ハ一ナリト云ハサル可カラス」(『全集』第1巻, 197頁) とし、靈魂の自覚作用から靈魂の単一性が演繹される。同様にロッツェは『形而上学』の中で我々の心の中には統一作用があるからこそそれを可能にする靈魂は「靈魂は不可分且つ単一の実体」とするのである²⁾。最後に両者の靈魂論のもう一つの類似点を示したい。それは次の点である。二人とも靈魂のことを「実体 (substance)」と定義したものの、両者とも特別な意味で「実体」とい

(12) 清沢満之の「自覚の一体」としての靈魂定義について (B. MARTI-OROVAL)

う語彙を用いている。因みに、清沢が活躍した時代、西洋の翻訳語はまだ安定していなかった所以他は「実体」のことを「一体」や「本体」と訳していたことに注意しておきたい。清沢はその概念を使用していたにも拘らず、『宗教哲学講義』では次の如く興味深い文を記述した。

吾人ノ一個ノ本体ト云ヘルハ固ヨリ無形上ニ於テ説ケル言ニシテ決シテ之ヲ有形的ニ思考スヘカラズ 無形上ニ於テ説ケルトハ他ナシ能ク自覚ノ統一ノ生起シ得ル本源ヲ一個ノ本体ト云ヘルナリ。(『全集』第1巻, 197頁)。

彼が使っている「一体」は、唯物論説だと誤解してはいけないとこの文で読者に注意しているのである。それと対照させて、清沢は「一体」という概念自体は「自覚の統一」を可能にすることを示しているという意味しか持たないと述べた。以下の引用に明らかなように、清沢の論点は正にロッツェと近似している。ロッツェは『形而上学』以前の論文では、靈魂は「意識の統一」と定義し、それは「実体」であると論述したことによって、その「実体」は唯物論のように解釈されたことがあった。しかし、『形而上学』でその誤解を解かんが為ロッツェは「実体」の自分特有の定義として「結果を生み出しそれを—それが力を持つなら—体験し得る力を有するあらゆるものを意味するというものだ」³⁾と定めた。

4. 結び

上に説明した如く、清沢とロッツェの靈魂論の内容比較から、清沢の靈魂論へのロッツェの影響は存在したと考察できる幾つかの論拠（靈魂定義、反唯物論、靈魂の単一性、「実体」という言葉の意味）を挙げた。今後、清沢の靈魂論を解明するには、ロッツェに止まらず他の西洋哲学者の影響も分析し、詳らかにすることが重要である。更に、西洋の思想系統を視野に入れながら仏教教学の影響も検討し、その基礎的な研究に基づいて両思想伝統が清沢の靈魂論の中でどのように調和されたのかを再考する必要があると考える。

1) Hermann Lotze, *Metaphysic: in three books, ontology, cosmology, and psychology*, English translation, edited by Bernard Bosanquet (Oxford, Clarendon Press, 1884), pp. 422–423.

2) H. Lotze, *op. cit.* p. 426.

3) H. Lotze, *ibid.*

〈キーワード〉 清沢満之, 宗教哲学, 靈魂論, 自覚, ロツツェ

(バレンシア大学, 早稲田大学交換研究員)